

は何かということを追求し、そこに七事と一極微という関係に分解し。その一極微に七事と結びつけるはたらきを見出した。それが Dīpa の立場である。Dīpa ではこの考え方を更に発展させて、縁起論にまで及んでいる。

すなわち Dīpa 三二五偈の長行では「勝義として存在しているものに縁起としての状態・努力・資料・所作等がある」(Abhidh-d. p. 274) とし、又三三三偈では、「分位は何らかの存在しつゝある事物 (vastu) にとつて生ずる、努力・時間・有情・所作も同様である」(Abhidh-d. p. 281) とし、その長行では、事物即ち実物 (dravya) に依存しているものが勢力であり、この実物がはたらき (vṛtti) を起す時が現在であると解釈される。この部分を佐々木現順師は次の様に理解している。「勝義としての存在は事物であり、実物である。衆賢が自性或は体といっている概念である。その自性の存在構造が縁起である」<sup>④</sup>と。すなわち、自性としての存在である法体は常に作用を伴うもので、それが外に顕われるとき三世の分位が定まる。Dīpa 262 偈では「過去未来世の分位なる諸法は実物として存在しつゝあるものである」とされる。

八事俱生説における実物もその様な意味をふまえて理解する必要がある。ここに有部における認識論が縁起と結びつく。すなわち、存在の構造が縁起として理解される。そこに一切法因縁生、更には諸行無常への展開が証せられてくるのではなからうか。

## 註

① 佐々木現順「阿毘達磨順正理論」京都(東本願寺)一九六

五・四～五頁。G. H. Sasaki: "P. S. Jini: Abhidharma-dīpa with Vibhāṣāprabhāvṛti" Bulletin of the School of Oriental and African Studies XXV: part 2, University of London, 1962 参照。

② この問題について、小川一乘氏より、Dīpa の極微俱生説と中観五蘊論におけるそれとの類似点について教示があった。その部分を読んでみると、確かに関係があると思われるのでそれについては別の機会に論究することにした。

③ 佐々木現順「阿毘達磨思想研究」(弘文堂)東京・昭三四・三三七～三四〇頁参照。

④ 佐々木現順「阿毘達磨順正理論」一三〇頁。

## 平安朝時代における弥勒信仰

石橋義秀

弥勒信仰は印度においても中国においても弥陀信仰より早く行われたのであるが、我国においても先ず伝えられたのは弥勒信仰であったであろうと言われている(松本文三郎「弥勒浄土論」参照)。文獻の上から見ても、『日本書紀』の敏達天皇十三年(584)の条に、百濟から鹿深臣が弥勒の石像を將來し、蘇我馬子が仏殿を造つてその像を安置したとあるのに対して、弥勒信仰が文獻の上に見えるのは『日本書紀』の舒明天皇十二年(600)の条に、僧慧隱をして無量寿経を講せしめたところのが最初である。その

後、弥勒信仰が広く行われたことは種々の記録の上からも明らかである。例えば『扶桑略記』の天智天皇七年(688)の条に、天皇は近江に崇福寺を造られたが、その金堂には弥勒像を安置せられたとある。奈良時代には弥勒經の書写や弥勒像の造立が盛んに行われたようで、例えば、石川年足は天平二年に父の為に弥勒成仏經を書写し、天平十年には母の為に弥勒上生經を書写しており、また、広隆寺・当麻寺・岡寺等の弥勒像は当時制作されたものと認められている。

ところが、平安時代から鎌倉時代にかけて弥勒信仰が著しく発展した為に弥勒信仰は影を薄くしたようではある。しかし、『靈異記』・『三宝絵詞』・『栄花物語』・『法華驗記』・『今昔物語集』・往生伝類等、当時の文献には弥勒に関する記事がかなり多く見られる。また、『源氏物語』夕顔巻には、源氏は五条の夕顔の許で明け方近くに、御嶽精進であろうか、「南無当来導師」と翁びた声で弥勒菩薩に祈願しているのを聞いて、夕顔に「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」とあわれがり、「優婆塞が行ふ道をするべにて来ん世も深き契たがふな」と弥勒の世をかね給うとあり、『枕草子』には、「よき男の若きが御嶽精進したる。たてへだてゐて、うち行なひたる暁の額など、いみじうあはれなり」とあるが、このような記述から平安時代において御嶽詣・弥勒信仰は一般に広く行われていたと言えよう。

『栄花物語』巻十五には、「藤原道長が」高野に参らせ給ひては、大師の御入定の様を覗き見奉らせ給へば、(大師は)御髪青やかにて、奉りたる御衣いささか塵ほみ煤けず鮮かに見えたり。

御色のあはひなどぞ珍かなるや。たゞ眠り給へると見ゆ。あはれに弥勒の出世龍華三会の朝にこそは驚かせ給はめと見えさせ給。」とあり、この話から弘法大師は入定して弥勒の出世を待つておられると信じられていたことがわかる。同様のことは『今昔物語集』巻十一の箇に、弘法大師は金剛峯寺に入定の所を造つて結跏趺坐して入定したが、弟子達は遺言によつて弥勒の宝号を唱えた、その後、観賢僧正は大師の入定の峯を開いてみると、大師の御髪は一尺許のびていたので、観賢は身を清めて峯に入り、大師の御髪を剃り淨衣を着せ奉つた、その後、大師入定の峯へ人が詣でると峯の戸が少し開き、物の鳴る音があり、或時は鉦を打つ音があつたとある。このような話は弘法大師入滅の当初からあつたのではないようであるが、延喜の頃になつて高野山は兜率天の内院であると信じられ、また弘法大師は弥勒の化身であるとする信仰が生ずるようになったのである。

また、平安時代中頃には吉野の金峯山は弥勒下生の地であると信じられていたようである。抑々吉野の金峯山は『万葉集』に「神さぶる磐根こしきみ吉野の水分山を見れば悲しも」とあるように水分山とも呼ばれ、吉野川の水源地として人々から尊信されていたが、そのような神聖な地は金の産地に違いないと信じられ、金の御嶽、金峯山という名がつけられたようである(和歌森太郎『修驗道史研究』参照)。『三宝絵詞』(巻下、東大寺千花会)に、東大寺建立の際、大仏及び堂塔を造るのに多量の黄金が必要になつたが、当時の日本には金がない、そこで金峯山の蔵王に「今、法界衆生の為に寺を建て、仏を造れるに、我國、金なくし

て此願なり難し。つてに聞く、此山に金ありと。願は分給へ」と祈願すると、蔵王は「此山の金は弥勒の世に用るべし。我は只守るなり。分がたし。……」と告げたとある。この説話は『今昔物語集』(巻十一の13) などにもあるが、このような話から金峯山には金があると信じられ、さらに、その金は弥勒菩薩が金峯山に下生される時に用いられるものであると信じられていたことがわかる。平安時代中頃に浄土信仰が流布してくると、金峯山は弥勒の浄土と做されたようである。『梁塵秘抄』に「金の御獄は四十九院の地なり……」とあるように、この山は四十九重摩尼殿(弥勒の浄土たる兜率の内院)であると信じられたのである。以上のように、金峯山は弥勒の浄土と信じられ、弥勒信仰の中心となったのである。藤原道長は寛弘四年八月金峯山に参詣し(『栄花物語』巻八など)、自ら書写した経巻を山上に埋めたが、その埋経の趣意は、その経筒の銘文によると、弥勒菩薩がこの地に下生して成仏される時、道長は極楽から金峯山に参詣して弥勒仏の説法を聴聞する、その時にこの経巻が地下から湧出し、会衆を随喜させようというのである。

以上述べたように、平安時代には弥勒信仰がかなり広く行われていたのであるが、次に、当時の弥勒信仰についてももう少し具体的に考察したいと思う。

まず、平安時代初期に編纂された『靈異記』には弥勒菩薩の話が三例見られる。それは①弥勒の銅像が盗難に遭い、盗人の為に毀れた時、弥勒像は叫び声をあげて通行人に知らせた(中巻第二十三縁)、②瑜伽論を書写しようと発願した貧しい行者の為に

弥勒菩薩はその山寺の柴の上に化現してその行者を加護し、瑜伽論を書写供養させた(下巻第八縁)、③弥勒の丈六の像が蟻にその首をかまれた時、呻き声を出して一人の優婆塞に知らせた(下巻第二十八縁)という弥勒菩薩の靈驗譚である。

言うまでもなく、弥勒菩薩は今兜率天の内院におられ、兜率天での一生が終った後、この土に下生して釈尊が菩提樹の下で成仏せられたのと同じように龍華樹の下で仏の悟を開き、衆生の為に三度説法せられる一生補処の菩薩である。人間が仏なる為には直接に仏に会って記別を受けなければならないと説かれているが、釈尊入滅後の衆生が記別を受けようとするれば弥勒仏に是非とも会わねばならない。その為には先ず兜率天に生れて弥勒の成仏を待つか、或いはこの土で弥勒の下生を待つか、二者のいずれかの道を選ばなければならないのである。

しかし、『靈異記』の世界では、そのような遠い将来に対しての願行ではなく、いま目の前において弥勒菩薩の靈驗を蒙ることだけが記るされている。右の三つの靈驗譚はいずれも奈良朝の話であるが、後述の如く平安朝の話にはこのような現世利益的な信仰は殆んど見られない。尤も、『靈異記』は現報の靈異譚を集めることを目的としたものであるからこのように現世の靈驗を記すことだけに終ったのかもしれないが、奈良朝の弥勒信仰は大体このようなことであつたのかと思われる。要するに、平安朝よりも前に於いては人々の仏教に対する意識が低く、難解な仏教の教義が十分に理解されていなかった為に、観音菩薩や薬師仏などの仏・菩薩に対するのと同じように弥勒菩薩に対しても専ら現世の

利益が願われていたようである。

ところが、平安朝時代に於いては弥勒菩薩に対する現世利益的な信仰は全くと言っていい位見られず、大抵は兜率天への上生を願う信仰である。兜率上生を願う話は『法華験記』や『今昔物語集』等にかなり多く見られる。また前述の弘法大師入定説話や皇円阿闍梨が弥勒の下生を待つて、蛇になって桜ガ池にいるという話もあり、平安朝に弥勒の下生を待つ信仰も見えるが、多くは兜率天への上生を願う信仰であった。そこで、次に兜率天上生説話を通して人々の弥勒菩薩に対する信仰について考察したいと思う。

先ず、人々は兜率天に生れることをいかに願っていたかという点、例えば、『法華験記』に、僧道栄は「若し善苗を植ゑずんば、仏果を結ぶべからず」と思い、年来法華経を書写していたが、夢に自分の写した経が塔の内に充滿しており、一沙門から兜率天上生を予告された、道栄は大変喜び、兜率天に生れんが為に愈々心を發して書写供養したとあるが、この一例からも人々は兜率天に生れることを熱心に願っていたことがわかる。

では、次に兜率天に生れる為に人々はどうのような行業を修していたのかと言うと、(1)相応・円善・仁鏡・安勝・明蓮・道命・修寛・女弟子紀氏・長明・和有等は法華経を誦誦し、(2)道栄は法華経を書写し、(3)良門は法華経を書写し、諸仏菩薩像を造立し、(4)仲遠は法華経を誦し、弥陀仏を称念し、その他造仏写経等の善を修し、(5)景遠は大般若経・法華経を書写供養し、(6)行範は念仏を修し、(7)そうむねは観音をたのみ、多くの塔を造り、(8)実親は窮

困者に飲食を施し、法華講を聴聞している。以上のように、その行業は人により種々様々である。しかし、どのような形にせよ自らの力で善根を積むことによって兜率天に生れる事ができると考えられていたようである。特に僧円善や藤原仲遠は数多くの善根を積んでいるが、要するに、人々は兜率天に生れる為には莫大な善根を積まなければならないと考え、その為に変な努力をしたのであるが、その行業の種類は問われなかったのである。それは阿弥陀仏の極樂に往生する為の行業と殆んど同じであることは注意すべきである。

ところで、そのような善根をいくら積んでも本当に兜率天に上生できるのかどうかは誰にもわからないのである。従って、修行者はあらかじめ上生できるという証拠が与えられることを希望するようになる。では、その証拠とは一体どのようなものと考えられていたかというと、例えば、壬生良門は發願して法華経千部を書写したが、供養の時、白蓮華が降り、堂の内に音楽が聞えるなどの奇異の瑞相があり、臨終に良門は「多クノ天女、樂ヲ調エテ空ヨリ降ル。我レ彼ノ天女ニ具シテ、兜率天ニ昇ラムトス」と言つて入滅したとあるが、このような奇異の瑞相が兜率天に上生できる証拠と考えられた。また夢告も兜率天に上生できる証拠と考えられたのであるが、極樂往生の場合も奇瑞や夢告がその証拠と考えられている。

以上のように兜率天に上生する為の行業や証拠は極樂往生の場合と類似しているが、『法華験記』に、源信僧都は臨終に「自分は極樂に生れたいと願っていたが、意に反して兜率天から御使が

迎えに来られた、そこで年来の希望を述べて兜率天上生を辞退したところ、御使は帰られ、近頃は観音が来られるので必ず極楽に生れるだろう」と親友に語ったとある。

源信は『往生要集』において、極楽と兜率天とを比較し、一応極楽の方を勧めているが、極楽も兜率天も共に仏の勧め讃えておられる所であるから相互の是非をたててはならない、極楽・兜率天どちらでも各自の好む所に従えばよいと述べている。尚、前述の道長の信仰は『往生要集』の思想に依っていると考えられる。

即ち道長は『栄花物語』に依れば熱心な念仏者であり、臨終に阿弥陀仏の御手から垂れた糸を握り、念仏を唱えて亡くなったのであるから、西方願生者と言うべきであるが、前述の銘文に依ると、道長の最終の目的は極楽往生ではなく、弥勒成仏の時、極楽から此土へ来て、弥勒の記別を受けることであつたのである。

要するに、平安朝時代において兜率天上生は極楽往生と殆んど同じように考えられていたようである。即ち、行業や証拠においても大差はないし、また、仏成の過程を考えても、兜率天上生の場合、勿論兜率天で成仏できるわけではなく、弥勒の成仏を待ちながら修行し、弥勒の下生の時一緒に下生し、その説法を聞いて記別を受け、更に修行をした後に成仏するのであるが、一方、極楽往生の場合、極楽に往生してもすぐ成仏できるのではなく、長い間そこで修行し、必要があれば弥勒成仏の時この土に来て弥勒の説法を聞き、それから成仏するのである。従つて、両者の優劣は決め難いのである。尚、千観阿闍梨は夢に「信心は深し、豈極楽上品の蓮を隔てんや。善根無量なり、定めて弥勒下生の暁を

期せん。」と告げられたとあるが、この記事からも当時弥陀信仰と弥勒信仰とは区別しがたいものがあつたと言えよう。

以上、平安朝時代における弥勒信仰について、その概要を記したが、紙数の関係で省略した資料も少なくない。詳細は、「国語と国文学」（昭和四十六年一月号）に発表したから、それ（平安朝に於ける弥勒信仰）を御参照頂ければ幸いである。

## 法蔵菩薩と阿弥陀仏

小林 光 紀

宗教における人間の常識を超えた表現、たとえば神話といわれるが如きものに関して、現代ではその表現を常識、或いは理知の範囲内にひきおろす非神話化が叫ばれ、そうした努力が大いになされてきているというが、非神話化という理知による把握の追求は、そこに大きな危険性があることを承知しておかなければならないであろう。なぜならば、神話的にしか表現されない宗教経験が、非神話化されることによって、かえつてその生命を失うことにもなりかねないからである。

『大経』所説の法蔵比丘の五劫思惟、願發起、願酬報の阿弥陀仏等は、まさしく神話と名ざされる如きものであるので、その因位法蔵比丘と果位阿弥陀仏（釈迦も必然的に関連してくるわけだが）に関して考えてみたいと思う。『大経』所説の法蔵比丘は国を棄て、王位をすて、沙門になつたとあることから、法蔵比丘は